

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2019年9月号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第7回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ピアノ部門:2019.5.25(土)~6.9(日) ヴァイオリン部門:2019.6.15(土)~6.30(日)

第7回仙台国際音楽コンクール ピアノ部門 野島稔審査委員長インタビュー

取材:高坂 はる香(音楽ライター)



ハマった時は非常に魅力的に響いていました。平均点を取りにくいことなく、臆さず自分の音楽を表現する、日本人にあまりいないタイプですね。将来が楽しみです。

第6位のキム・ジュンヒョンさんは、予選から良い演奏をしていました。フレーズの歌わせ方に特徴があるので、評価が分かれたかもしれません。でもモーツァルトの K459 は彼の個性によく合い、生き生きと弾いていました。

—審査において、意見が割れるようなことはありませんでしたか？

審査結果は完全に点数で出されますので、システム上、議論が起きることはありません。ファイナルで順位を決める投票でも、何段階にもわけて投票をし直すようなケースはほとんどありませんでした。

—入賞者それぞれの印象をお聞かせください。

優勝したチェ・ヒョンロクさんは、全ラウンドで安定していました。また、ファイナルでモーツァルトと自由選択の協奏曲、両方を高いレベルで演奏したことも評価のポイントだったと思います。オーケストラとの共演経験もあまりない中、信念を持ち、それをそのまま舞台上で弾くことができるのは、才能だと思います。

ピアニストとして自立するためには、一曲すばらしく弾けても十分ではありません。協奏曲はオーケストラの要望で曲が決まることも多いからです。世界が狭いと、プロとして活動していくことはできません。

第2位のフェンウィクさんは、魅力的な才能の持ち主です。特にチャイコフスキーの協奏曲は、音楽の掴み方のスケールが大きく、東洋人にはこういう弾き方はできないと感じました。クライバーンの演奏が好きだと話していましたが、実際聴きながらちょっと似ていると思いましたね。一方のモーツァルトも良かったけれど、少し粋をはみ出すようなところがあったかなと思います。持ち味を生かし、場数を踏むことで、大きく成長するでしょう。

第3位のパルホーメンコさんは、音も非常に良く、ベートーヴェンの4番を魅力的に演奏しました。ただモーツァルトは、世界に浸りきれていないのではと感じる部分もありました。彼女が好きなプログラムでリサイタルをするときには、ぜひ聴きに行きたいピアニストです。

第4位の佐藤元洋さんは、素直な音楽が魅力で、特にベートーヴェンの3番は、落ち着きを持って、聴衆に音楽の偉大さがわかる演奏をしました。いろいろな才能を持っているので、これからじっくり勉強を重ねることで格段に良くなっていくでしょう。

第5位の平間今日志郎さんは、音楽に特色があり、自分の演奏を楽しんでいることが伝わってきて、その表現が曲想に

—韓国のピアニストの優勝は3回連続となります。韓国の教育やピアニストの特徴について感じることはありますか？

韓国のピアノ教育事情について詳しいことはわかりませんが、ピアニストたちからは、強さを感じます。音楽的に成熟してきたことで、国内の競争も激しいのかもしれません。

特に協奏曲では、ソリストが自分の音楽をオーケストラと指揮者に伝えなくてはなりません。また音量や音質も、ボディのしっかりしたオーケストラの音に合わせて、存在感を伴った形でコントロールする必要があります。リハーサルを経て、本番で瞬時にそういった状況に対応するには、精神的なタフさが求められます。少しでも臆してしまうと、それが音に現れてしまいますから。その点で、韓国のピアニストは強いと思いました。音楽への入り込み方が強烈で、表現意欲が高く、その耐久性もあるように感じます。

—今回の開催を終えてのご感想をお願いします。

20年近く審査委員長としてこのコンクールを見てくる中、回を重ねるごとに、階段を1段どころか2、3段ずつ駆け上がっていくようにレベルが上がり、応募者も増えました。その分、予備審査から僅差で合否の差が出るため、審査は大変でした。

また、前回からピアニストにとって大切なレパートリーであるベートーヴェンとモーツァルトの協奏曲が必須課題となっていますが、これは各国の審査委員の先生方からも好評で、実際、コンクールを格調高く充実したものにしていくと思います。こうしたレパートリーを若いうちに真摯に勉強しておくことは重要だと、私自身実感しています。コンテストたちも実際、リハーサルと本番を経験する中、新しい世界を見ることができたと話していました。何かを得たという実感があったのでしょうか。大変嬉しいことだと思います。

第7回仙台国際音楽コンクール ヴァイオリン部門

堀米ゆず子審査委員長インタビュー

取材:片桐 卓也(音楽ライター)



—仙台国際音楽コンクールの特徴は？

予備審査後に選ばれた 40 人あまりの候補者たちが直面するコンチェルトの数々、バッハ、モーツァルト、20 世紀のプロコフィエフにストラヴィンスキー、バルトーク、そしてロマンチックな名曲の数々、それらをほぼ初めてオーケストラと演奏できる!この事が今や世界中に多々ある国際コンクールと違う仙台の大きな特徴です。コンチェルトをソリストとして演奏する事は他の演奏会とは異なります。確固たる 200%のテクニックを保持する事、コンチェルトを弾きぬく体力と気力、知識、そしてそれを追求する困難な過程においてある種の「ま、いいか!」のような楽観的性格があることが欠かせません。

—6 人のファイナリスト、それぞれについての感想をお聞かせください。

第 2 位となったシャノン・リーさんですが、セミファイナルでのバルトークの協奏曲はとても素晴らしかったと思います。ファイナルでは、特にモーツァルト(K218)の第 3 楽章が素晴らしかった!あのグラツィオーソは本当に音楽的だと思いました。逆に言うと、他のファイナリストのモーツァルトは今ひとつでした。コンチェルトを人前で弾いて、何か最後に納得させることが彼女のチャイコフスキーはちょっと物足りなかったのです。他の審査委員も彼女には期待していたのですが、安全圏を行ったのか、そこまでは至らなかったという印象です。しかし彼女は上記に書いた条件を持っている人です。これからの活躍が期待できます。第 3 位となった友滝真由さんはよくやったと思います。どの曲も丁寧に弾いていて、セミファイナルでのプロコフィエフも良かった。ファイナルでのブラームスは、最初はちょっと疑問符が付く演奏でしたが、第 2 楽章から良くなって、それが第 3 楽章まで繋がったので良かったと思います。第 4 位となった北田千尋さんはメンデルスゾーンが物足りなかったですが、セミファイナルのプロコフィエフ、それから予選のバッハとイザイはとてもよく弾けていました。音の出し方をもっとソリストチックにして行くことがこれからの課題でしょうね。第 5 位のイリアス・ダビッド・モンカドさんはとても才能があると思いますが、その才能をどう活かして良いのか、まだ分からない感じがしました。これは学生からプロフェッショナルの演奏家に移行する際の課題で、全員に言えることです。チャイコフスキーで肩当てが落ちる、しかも作品の中で一番難しい場面の前で、というアクシデントを乗り越えて演奏を続け

たのは素晴らしい。特にその部分はテンポも安定して細部もよく聴こえたので、肩当て取ってみては?と彼に提案しました。第 6 位のひとり、荒井里桜さんはファイナリストの中でも若いほうでしたが、どの曲も手堅くまとめていたと思います。もうひとりのコー・ドンフィさんは絶叫型の演奏家でしたね。ちょっと楽器をガリッと鳴らす場面が多過ぎた。ああいう音はプロフェッショナルの演奏家は出してはいけません。勢いはあるのでこれからもっと音を聴いて演奏してほしいと思いました。また予選でもチャーリー・ラヴェル = ジョーンズのバッハ、古澤香理さんのイザイ等名演奏がいくつかありました。これから頑張ってください。

—セミファイナルでコンサートマスターとしての課題を導入した訳ですが、どんな点に注目されていましたか？

注目点は審査委員によって違いました。ロドニー・フレンドさんは「ボディ・ランゲージ」とおっしゃっていましたが、背中でどれだけ音楽を伝えられるかという点に注目していらしたようです。私が一番注目していたのは音です。コンサートマスターが替わることによって、オーケストラのヴァイオリン・セクションの音がこれだけ変わるのだということは発見でした。それとソロだけでなく、オーケストラとの掛け合いになった時に、どれだけ音楽が身体の中に入っているかという点にも注目していました。

—コンサートマスターとしての採点は、どのように結果に反映されたのでしょうか。

それは審査委員からも質問を受けましたが、その評価の比重をどれくらいにするかは、各審査委員にお任せをしました。トータルで考える方もいらしただろうし、パーセンテージで考える方もいらしたと思います。こういうバランスでという指定はしていません。コンサートマスターという役割はヴァイオリニストにとってとても重要なものなので、この課題はこれからもコンクールの中で続けて行きたいと思っています。

—バッハを予選の課題曲としたのは？

バッハの協奏曲はあまり演奏されていないと思うのですが、音楽が奥深いし、ヴァイオリニストとしての色々な要素がよく分かります。ソロ・ソナタのフーガを弾かせるよりも、その人の歌心も分かるし、オーケストラのリズムを自分の中に取り入れることが出来ているのかも分かります。

—ファイナルでのモーツァルトはとても難しい課題だと思いましたか？

モーツァルトはどこに持って来ても難しいです。モーツァルトの様々な音楽的な要素、特にオペラ的な部分も意識して、想像力を働かせて演奏して欲しいですね。この仙台のコンクールはブラームスやバルトークといった大きな協奏曲を演奏しなければならないので、それらを中心に練習していて、バッハやモーツァルトの練習に割く時間が無くなってしまふということもあるかもしれません。でも、もっと好奇心を持って取り組んでほしいと思いました。いずれにせよ最初にお話したようにコンチェルトを弾くという経験を通じて彼らの勉強が飛躍的に発展することと思います。期待しています。